

平成 30 年 6 月 14 日現在

機関番号：25501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02013

研究課題名(和文) 自然倫理思想の比較研究 F・G・ユンガーの戦後思想と現代のコスモロジー

研究課題名(英文) Comparative study of natural ethics - F.G. Juenger's postwar thought and modern cosmology

研究代表者

桐原 隆弘 (Kirihara, Takahiro)

下関市立大学・経済学部・教授

研究者番号：70573450

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、F・G・ユンガーの戦後思想の検討を通じて、現代自然倫理学の諸潮流を体系的・批判的に考察することを目指した。自然倫理研究については生殖医療技術論を主題として3本の論文を公刊するなど進展が見られた。一方、ユンガーの「コスモロジー」思想の意義、および戦後の諸思想との比較については十分な考察を行うことができなかった。研究会を重ねることで『技術の完成』の翻訳出版にまで漕ぎつけ、かつこれに研究論文にも匹敵する分量の解説文を付したことは最大の成果である。今後は、翻訳出版を無事終えたうえで、この翻訳書に対する読者層の反響を見ながらF・G・ユンガー研究を継続し、かつ自然倫理研究も深めていきたい。

研究成果の概要(英文)：In this research, we aimed to systematically and critically consider various trends of modern natural ethics through examination of F. G. Juenger's postwar thought. Progress on natural ethics research, such as publishing three papers on reproductive medical technology, was observed. On the other hand, We could not do enough consideration about the significance of Juenger's "cosmology" idea, and the comparison with various thoughts after the war. It is the greatest achievement that by repeatedly conducting research sessions, we have rolled up to the translation publication of "Perfektion der Technik" and attached a commentary equivalent to the research paper to this. In the future, after safely completing the translation publication, we would like to continue research on F. G. Juenger and deepen the research on natural ethics while seeing the reaction of readers to this translation.

研究分野：哲学

キーワード：自然倫理 コスモロジー 生命倫理 生殖医療技術

1. 研究開始当初の背景

前回の科研費研究「F・G・ユンガー技術哲学の現代的意義に関する学際的比較研究」(平成 24-26 年度)では、F・G・ユンガーの『技術の完成(Die Perfektion der Technik)』(1944 年)を哲学史、ドイツ文学史、エコロジー文学、科学技術史の文脈から詳細に検討した。今回の研究「自然倫理思想の比較研究

F・G・ユンガーの戦後思想と現代のコスモロジー」では、戦後のユンガーの自然観に注目し、これを現代の自然倫理思想の文脈において検討することとした。

検討する文献としては、『技術の完成』にくわえ、同書の第二部として増補された『機械と所有(Maschine und Eigentum)』(1949 年)、哲学論文集『言語と思考(Sprache und Denken)』(1962 年)、および『完全なる被造物 自然かそれとも自然科学か(Die vollkommene Schöpfung: Natur oder Naturwissenschaft?)』(1969 年)等を予定していた。また、『完全なる被造物』と同時代に発表された石牟礼道子の『苦海浄土』も参照しながら、各国における 1950 年代、60 年代の自然倫理思想を再構成する予定であった。

2. 研究の目的

F・G・ユンガーの自然観(「深い秩序」をもつ「原初的自然」からの技術的合理性への対抗性を中心とする、反進歩主義的・循環的自然観)に焦点を当て、彼の戦後思想の検討を通じて、ユンガー哲学のコスモロジー思想としての核心部を同時代の思想・文学と比較しつつ再構成し、かつ共同研究を通じて、現代自然倫理学の諸潮流を体系的・批判的に考察するための視座を構築することにつなげていくことを目的とした。

3. 研究の方法

「学際的比較研究」による共同作業を基本的な方法とする。哲学(哲学的倫理学)、ドイツ文学、エコロジー文学、科学史それぞれを専門とする研究者を中心に、「F・G・ユンガー研究会」を下関および京都で引き続き開催し、代表者、分担者、協力者の共同の討議、およびゲストスピーカーによるレクチャーを通じてコスモロジー、自然倫理思想全般に関し知見を共有し、各自の問題意識から論文を執筆し、論文・著作を公刊する。

4. 研究成果

【平成 27 年度】

桐原隆弘(代表者)「自然の隔離か自然の取り込みか? 文化の位置づけの観点から見たドイツ生殖医療技術論争」が代表的な成果である。当論文では、2000 年代初頭、生殖医療技術をめぐるドイツで展開された哲学的・倫理的論争に注目したうえで、日本を含めた生命・医療倫理の展望を探求した。

論文末尾で、「リンゴ一つをとって見ても、

それを構成する諸物質の合成と同等であると考えすることはできない」という『技術の完成』におけるユンガーの言葉を引用した。初期段階の生命の微細な「部分」(配偶子や遺伝子といった「物質」)への人為的介入が、生命体「全体」にいかなる影響を及ぼすかについてはそもそもあまりに未知数が多く、これを生命の改善などと称することは短絡であること、そしてむしろ、ハーバーマスの考えるように、生命における所与の偶然的条件に(「畏怖の念」をもってしてかどうかは問わないまでも)「触れない」ことこそが、本来の人為の領域たる文化世界において、自由と平等とを実現するための唯一の条件であるということを示すためである。

研究会は 2 回開催した。ユンガー『技術の完成』テキストの内容についての理解を深め、今回の科研の問題意識(現代自然倫理)との接続の趣旨を確認した。

【平成 28 年度】

最も重要な研究成果は、桐原隆弘(代表者)「道徳の社会理論 マルクス主義から社会学理論を経由してアドルノとハーバーマスの自我論へ」である。同論文は前掲の桐原論文「自然の隔離か自然の取り込みか? 文化の位置づけの観点から見たドイツ生殖医療技術論争」の問題意識を受け継いでいる。後者ではハーバーマスとビルンバッハーの見解の相違を中心に、「自己存在可能性」のための不可欠の条件と見なされ得る人間の生命の自然発生性や、「物件と人格」の枠組みでの初期胚の取り扱いの問題を自然観の文脈で検討した。

これに対し前者では、マルクス主義と道徳ないし自然観との関係に関する 20 世紀初頭以来の議論を踏まえたうえで、ハーバーマスとミヒャエル・クヴァンテとのマルクス主義理解をめぐる論争に焦点を当て、そこで扱われた生殖医療技術論を再構成した。人間の内的自然の改善は、まさしくハーバーマスの標榜する、そして初期マルクスに淵源すると見なされ得る「類倫理」として要求されてしかるべきではないかとクヴァンテは主張する。このある種の挑発に対し、ハーバーマスはあくまでも生命の自然発生性と自己の生の自律的形成との二元論に固執する。この論争においては、生殖医療技術に対する、さらには生命操作技術全般に対するアンビバレントな見方が反映されていると言えよう。

以上の研究成果は研究計画のうち、現代の自然観ないし「コスモロジー」と生命倫理分野におけるアクチュアルな課題との結びつきに関する一般的テーマを扱うものである。また昨年度は、3 回の研究会における討議を通じて、ユンガーの技術論・自然観について分担者、協力者各自の理解を深めた。

【平成 29 年度】

桐原隆弘(代表者)「What is the virtue

in biomedicine? A study through analysis of some types of philosophical argument against/for human genetic intervention」が代表的な業績である。本稿では、ヒト遺伝子への技術介入の是非をめぐる論争について、主要論者の哲学的論証の特質を批判的に考察したうえで、先端医療技術における「徳」の可能性を検討した。サンデルにおける「自律」論法と「公正」論法との混同、ハーバースにおける(「制作されたもの」に対する)「自然発生的なもの」の固有の地位の解明、ブキャナンにおける自然的不平等への是正的介入の「公正」論法による正当化、ヨナスにおける「献身 devotion」の徳の「患者・医療従事者・関係者の共同作業・連帯」としての拡大解釈、以上の論点に基づき、従来の生命倫理においても提起されてきた自律・平等と並んで先端医療において重視すべき徳倫理的観点を提起した。

F・G・ユンガーについては、『技術の完成』の翻訳出版の見通しが立ち、分担者・今井、協力者・中島および代表者・桐原がそれぞれ訳者解説を執筆した。ユンガー技術論における(1)初期思想からの変遷、主要な思想内容、影響作用(今井)、(2)エコロジー思想との関連(中島)、および(3)社会思想としての側面(桐原)について、それぞれ検討した。また、今井はエルンスト・ユンガーおよびハイデガーの技術論と『技術の完成』の関係について学会報告を行った。

なお現在、ユンガー技術論に関する学会セッション(社会思想史学会)を準備中である。

【総括】

助成期間全般にわたり、F・G・ユンガーについては『技術の完成』訳出作業の継続および訳者解説文の執筆が中心となった。またこの間、前掲3論文におけるような生殖医療技術論を中心とする自然倫理研究に進展があった反面、ユンガーの「コスモロジー」思想との関連性、およびユンガーの「コスモロジー」と戦後の諸思想との比較研究については十分な考察を行うことができなかった。

研究を進める過程で、「コスモロジー」よりも「自然倫理」の方に重心が移っていったと言える。その一方で、下関と京都での研究会を重ねることで『技術の完成』の翻訳出版にまで漕ぎつけ、かつこれに研究論文にも匹敵する分量の解説文を付したことは、前回の科研費研究も含めて最大の研究成果である。今後は、まずは翻訳出版を無事終えたうえで、この翻訳書に対する読者層の反響を見ながらF・G・ユンガー研究を継続し、かつ自然倫理研究も深めていきたい。

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計8件)

【平成29年度】

1. 今井敦、作家の「自伝」とその読者 トーマス・ベルンハルトとオーストリア社会、希土、査読無、第42号、2017、79-93
2. IMAI, Atsushi, Das Erzaehlwerk Joseph Zoderers aus japanischer Sicht. Versuch, es als Shishosetsu zu lesen, Joseph Zoderer. Neue Perspektiven auf sein Werk. Edition Brenner-Forum, Band 13, 2017, 135-146
3. KIRIHARA, Takahiro, What is the virtue in biomedicine? A study through analysis of some types of philosophical argument against/for human genetic intervention, 下関市立大学論集、査読無、第61巻第2号、2017、13-25

【平成28年度】

4. 桐原隆弘、道徳の社会理論 マルクス主義から社会学理論を経由してアドルノとハーバースの自我論へ、下関市立大学論集、査読無、第60巻第2号、2016、65-90
5. 増田靖彦、ハイデガーとドゥルーズ/ガタリの近さと遠さ 相依帰属性をめぐって、ハイデガー・フォーラム(電子ジャーナル)、査読有、第11号、2017

【平成27年度】

6. IMAI, Atsushi, Identitaet und die Zeitgeschichte in der Literatur aus Südtirol; Ein Vergleich zwischen Joseph Zoderer und Sabine Gruber, 龍谷紀要、査読無、37巻1号、2015、39-49
7. 桐原隆弘、自然の隔離か自然の取り込みか? 文化の位置づけの観点から見たドイツ生殖医療技術論争、下関市立大学論集、査読無、59巻3号、2016、75-102
8. 中島邦雄、空を映す水 - イメージに潜むエコロジー的世界観の比較的考察、上智大学ドイツ文学論集、査読無、52巻、2015、199-215

〔学会発表〕(計4件)

【平成29年度】

1. 今井敦、技術をめぐる交友、ユンガー兄弟とハイデガー 『労働者』『技術の完成』『技術への問い』を繋ぐもの、世界文学会2018年度連続研究会 第1回『時代と文学』、2017年

【平成28年度】

2. 桐原隆弘、ハーバースの「自己存在可能性」の概念について 生殖医療技術論争における類倫理構想とその批判、広島哲学会、2016年11月05日、広島大学
3. 増田靖彦、ハイデガーとドゥルーズ/ガタリ その近さと遠さ、ハイデガー・フォーラム、2016年09月11日、名古屋

大学

【平成 27 年度】

4. IMAI, Atsushi, Das Erzählwerk Joseph Zoderers aus japanischer Sicht. Versuch, es als Shishosetsu zu lesen, Internationales Joseph-Zoderer-Symposion, 2015 年 11 月 23 日 ~ 2015 年 11 月 25 日, Forschungsinstitut Brenner-Archiv Universitaet Innsbruck

〔図書〕(計 9 件)

【平成 29 年度】

1. 今井敦(翻訳)、トーマス・ベルンハルト『原因 ひとつの示唆』、松籟社、2017、156
2. 増田靖彦(共著)、加賀野井・伊藤・本郷・加国監『メルロ＝ポンティ哲学者事典』別巻、白水社、2017、564
3. 増田靖彦(共著)、平井・藤田・安孫子編『ベルクソン『物質と記憶』を診断する』、書肆心水、2017、384
4. 増田靖彦(共著)、岡田・野内編『交域する哲学』、月曜社、2018、304

【平成 28 年度】

5. 今井敦(翻訳)、トーマス・ベルンハルト『ある子供』、松籟社、2016、158
6. 増田靖彦(翻訳)、アンリ・ベルクソン『笑い』、光文社、2016、332
7. 増田靖彦(分担翻訳)、メルロ＝ポンティ哲学者事典 第 3 巻、白水社、2017、460

【平成 27 年度】

8. 奥彩子ほか(編)、東欧の想像力 現代東欧文学ガイド、今井(分担者)が「トーマス・ベルンハルト」を担当、松籟社、2016、318
9. 増田靖彦ほか(編)、21 世紀の哲学をひらく 現代思想の最前線への招待、ミネルヴァ書房、2016、296

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：

権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

桐原 隆弘(KIRIHARA, Takahiro)
下関市立大学・経済学部・教授
研究者番号：70573450

(2) 研究分担者

今井 敦(IMAI, Atsushi)
龍谷大学・経済学部・教授
研究者番号：10380742

中島 邦雄(NAKASHIMA, Kunio)
独立行政法人水産大学校・その他部局等・教授
研究者番号：00416455
平成 27 年度のみ

小長谷 大介(KONAGAYA, Daisuke)
龍谷大学・経営学部・教授
研究者番号：70331999
平成 27 年度のみ

増田 靖彦(MASUDA, Yasuhiko)
龍谷大学・経営学部・教授
研究者番号：50350369
平成 28 年度および平成 29 年度

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

飯森 伸哉(IIMORI, Nobuya)
稲葉 瑛司(INABA, Eiji)
川野 正嗣(KAWANO, Masashi)
熊谷 工ミ子(KUMAGAI, Emiko)
西尾 宇広(NISHIO, Takahiro)